

村山貴俊(東北学院大学経営学部教授)

東北の自動車産業集積への一考察

－山形県産業科学館・部品展示から
みえてきた強さと課題－

研究年報経済学(東北大学) Vol.74 No.2
pp.35～54 2014.7.

本論文は、山形県における自動車部品生産の実態調査から、東北の自動車産業集積の課題を明らかにしようとするものである。

本論文は、以下の4つの節で構成される。第1節の問題提起につづき、第2節では、東北が直面する課題を改めて整理している。東北は、トヨタグループの国内第3の拠点として、主にコンパクトカーの生産を担っている。コンパクトカーは、もっとも大きな生産規模が見込まれるセグメントであるが、同時に低価格への要求も厳しい。東北の部品産業は、トヨタの要求する品質を満足させつつ、グローバルにも通用するコスト競争力が求められている。東北にはもともと電子・電機産業の集積があり、それが潜在的な強みの一つである。しかし、筆者は電子・電機産業に適合した生産設備や工場建屋では、大型な部品の多い自動車部品には対応しづらいこと、東北の地場企業が必ずしも自動車部品への参入に熱心ではないことなどから、主要部品のほとんどが域外からの輸送や東北に進出した既存サプライヤーからの供給に依存している点を指摘する。そうした中、山形の地場企業が例外的に自動車産業への参入に積極的に取り組んでいる点に着目した。

そこで、第3節では、山形県産業科学館が行っている自動車部品の分解展示を手掛かりに、山形の地場企業がどのような部品を生産している

か丹念な調査を行った。筆者は、部品をシャーシ関連、エンジン関連、内・外装部品に分け、どのような部品がどの地場企業によって生産・供給されているかを整理した。その結果、山形の地場企業は、足廻りやパワートレインといった車の基幹機能に関わる部品を数多く手掛けていることを明らかにした。筆者は、非常に高いレベルの部品加工技術を有すること、金型製作から部品加工、検査までを一貫して行える体制を築いている点などを、山形の地場企業の強みとしてあげている。

最後に第4節では、自動車産業の集積が一足先に始まった九州と比較しながら、東北の特徴と課題を整理している。九州と比べると、東北(特に山形)は、精密な切削加工や特殊な鍛造技術を得意とし、機能系部品を手掛ける地元企業が少なくないが、九州は板金加工や樹脂成形などの内・外装部品が多い点が特徴である。ただし東北は、小ぶりの部品が多いだけに、中部・関東圏の既存サプライヤーとのコスト競争が厳しくなる可能性もあることを指摘している。

本論文は、従来十分に分析の光が当てられてこなかった山形の自動車産業集積をとりあげており、とりわけ山形に立地する地場企業ならびに進出企業と生産品目との対応関係を綿密な調査により明らかにしている点で、資料的価値が非常に高い。また、同じ東北でも地域により企業行動や企業家精神に違いがあることを指摘している点は興味深い。

本論文は、山形における産業集積を構造面から明らかにしたものであるが、今後の課題としては、第1に、こうした産業集積の構造的特性がどのような機能的特性を生んでいるかを明らかにすることであろう。例えば、集積内でのヨコの連携、トヨタ東日本や進出サプライヤーと

のタテの連携などがどのように機能しているかという点である。第2は、なぜそのような集積が生まれたかという発生論的な究明である。なぜ、山形と宮城では地場企業の意識や行動が異なるのか、その前提条件や分岐点などが明らかになれば、今後の東北における自動車集積のあり方に対する有益な示唆が得られることが期待できよう。

(九州大学大学院工学研究院准教授 目代武史)